

## 「予後管理の重要性について 一失敗と反省一」

長崎大学歯学部小児歯科学講座

細 矢 由 美 子

21年前の今頃、卒業後の進路決定に際し、“開業医が最も嫌って診療したがる”という理由から、私は小児歯科を選択しました。時は昭和48年、伝統に輝き立地条件の良い母校の小児歯科診療室における新患のwaiting期間は、何と2年半でした。上手に患者さんを断るのも新患当番の大切な仕事でした。当時、日本の小児歯科は小児歯科にあらず幼児歯科だと陰口をたたかれていましたが、この悪しき伝統を我々はいまだに引き摺っている様に思います。この原因の1つに、永久歯咬合が完成するまで患者をfollow upできていないという事があげられます。

虫歯の洪水の時代、乳歯の齲蝕をなくす方法の1つとして、モデル患者の教育が行われました。教育効果をあげる為に優等生を作ろうという訳です。ただし、この優等生には、現在と同様、齲蝕ゼロの優等生と多発した齲蝕をみごとに治療し終え、さらに定期診査にせつせと通院してくれる優等生の2種類がありました。特に後者の方々は、小児歯科の地位の改善に多大なる功績を残してくれました。虫歯の洪水時代の優等生は、自主的に定期診査に応じてくれましたので、定期診査を知らせる葉書や電話は、一切使用した事がありませんでした。

現在の診療室においては、開設以来、新患のwaiting期間は限りなくゼロに近く、定期診査も葉書で通知するようになりました。患者の年齢層も広がり、幅広い診療に取り組める環境を与えられ、自分の行った診療に対する反省も仕事の1つとなりました。

歯科医学は自然科学であり、歯は健康な真珠色であるべきという考えは、歯学部入学以来変わりませんし、近年それがあたりまえになってきた事は、嬉ばしい限りです。次は、失敗と反省という仕事を新患のwaiting期間同様、限りなくゼロに近づきたいものです。